

ヒトは豊かな感情をもつが故に、苦しむこともしばしば。自らの精神力だけで苦境に立ち向かおうとする人がいれば、「神さま、仏さま、ご先祖さま……」と心から願ひ、打ち勝とうとする人もいます。神様や仏様といった信仰は、古くより人の心の拠り所であり、生活に根付いたものでした。そんな信仰の中に、庶民に古くより信仰されてきた「観音信仰」があります。

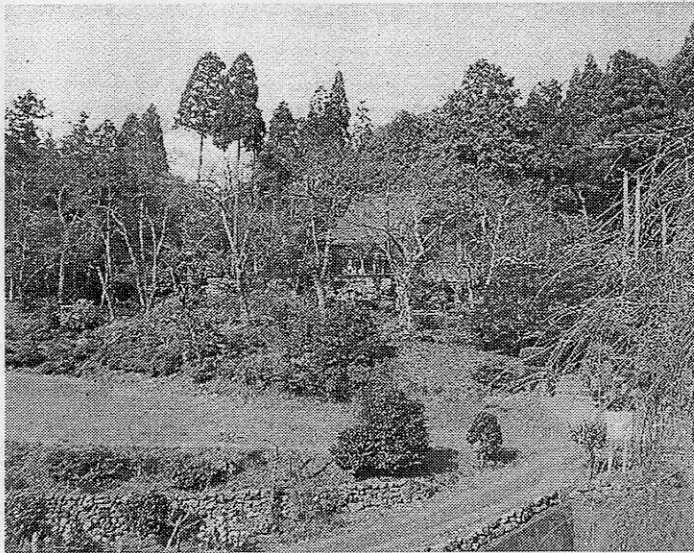
観音菩薩は仏教に登場する仏菩薩の中でも、最も親しまれてきた仏様のひとつです。国を護り、そして人々を危難から救う菩薩として、広く信仰されてきました。

各地には三十三カ所観音巡礼というかたちで観音信仰が生き続けています。最も古い三十三カ所巡礼は、平安時代に成立した「西国三十三所巡礼」ですが、この観音巡礼の「三十三」という数字は、天台宗の経典のひとつである

「観音経」で「観音は衆生を救うために三十三身に姿を変えてあらわれる」と説かれているところからきています。近江には西国三十三カ所の札所が6カ所（岩間寺、石山寺、三井寺、竹生島宝厳寺、長命寺、観音正寺）もあり、京都に次いで札所が多いところなのです。その背景には、近江が古くから奈良の影響を受けており、奈良時代ごろには興福寺の僧侶を中心に山林修行が活発に行われ、多くの寺院が創建されて観音さまが祀られてきたことがあります。8世紀造営開始とされる石山寺には、当時の作とされる観音像があります。他にも、観音さまが祀られる寺院には奈良時代創建とみられるものも多く、これら寺院は17世紀ごろ

に成立する近江西国三十三カ所巡礼の札所となっていています。平安時代になると、最澄によって比叡山に延暦寺が開かれ、近江が天台宗の中心地となります。このことにより、天台の影響は近江全域におよび、観音信仰がより厚く広がっていきます。十一面観音像（国宝）で知られる長浜市の渡岸寺や石道寺・赤後寺などをはじめ、湖北地域や湖東地域には、観音さまを祀る寺院がいくつもあります。これらの寺院の多くには、平安時代ごろに造られた観音像が安置されています。こういった古い観音像は、現在に至るまで、自然災害や戦乱など、多くの災いにさらされてきました。しかし、千年以上の時を経ても残り続けたのは、天台の影響

観音信仰



人里近くに静かにたたずむ観音堂
・石道寺

で観音信仰が庶民層に根付き、現在に至るまで護り伝えられてきたからでしょう。各地に、戦火から仏様をお護りした伝承が残されています。室町時代以降には、西国三十三カ所巡礼の巡礼者が、参詣の記念として納札を行うようになり、長浜市鴨田遺跡では、現存するものとしては全国で2番目に古い宝徳4（1452）年の年号を持つものを含め50点以上の三十三カ所巡礼札が出土しました。巡礼者たちは、第三十番札所である竹生島宝厳寺を西方の琵琶湖に望みながら、鴨田の地で休息したのでしょうか。また、大津市石山寺には、16世紀初めの金属製や木製の美麗な巡礼札が残されています。

近江の観音信仰は、古くより根付いてきた心のかたちです。科学が発展し、衣・食・住の心配がほぼなくなった現在でも観音信仰が続くのは、現在も千年以上前も、ヒトが求めるところはあまり変わらないということなのかもしれません。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 重田 勉）

近江に根付く心のかたち